

指導教員の取組み
就学相談を行いました

附属学校教育局 菅野和恵

附属学校教育局の指導教員の取り組みは様々なものがあり、その代表的なものとして、附属学校の先生方の研修(新任・10年経験者など)、附属学校の広報活動、附属学校の児童生徒・保護者・教員を対象とした教育相談、附属学校の先生方と協同行うプロジェクト研究などがあります。今年度からは、それらの取り組みに新たに就学相談が加わりました。

就学相談とは、本学の普通附属学校に入学を希望する心身に障害等のある児童生徒さんに対して、希望に応じて相談を行い、最適な就学方法について検討しあうとともに入学を希望する附属学校の校長先生に対して助言を行うものであります。今年度、早速、複数の相談が行われ、私もそのいくつかに関わらせていただきました。実際の面談においては、私たち指導教員の他に、入学希望の附属学校における入試担当の先生や特別支援教育コーディネーターの先生、児童生徒さんの障害等に関わる附属特別支援学校の先生、保護者、場合によっては児童生徒本人も交えて話し合いがもたれ、入学試験及び入学後の修学における特別な教育ニーズについて検討されました。児童生徒の障害等に関わる特別支援学校の先生が相談に加わってくださることによって、専門的な見地からの助言を頂くことができ、入学を希望する附属学校のみならず、保護者・児童生徒においても非常に有用な情報が得られた機会となったようです。

これまでも、普通附属学校において、障害等のある児童生徒さんが修学することはありましたが、就学相談を行うことによって、障害等のある児童生徒さんを支援する体制を計画・組織的に整えることがより一層進むのではないかと思います。筑波大学には、普通附属学校と障害附属学校があります。それらの学校は、それぞれの学校種において全国の拠点校としての高い実績があります。普通附属学校に通う障害等のある生徒さんを、障害児教育のスペシャリストである障害附属学校の先生方が後方支援する、そして生徒さんは理解のある仲間や先生に囲まれて生き生きと生活する、そんな姿が当たり前ものとなるにはどうしたらいいのか、これからの考えていきたいと思っています。



温故知新

「経験領域表」
—知的障害養護学校の教育内容—

附属大塚特別支援学校副校長 神田基史

昭和27年附属小学校に特殊学級である第5部を再開し、当時の教師は学級便りを通じて週の予定や日課を計画的に連絡する方法でカリキュラムづくりを進めた。昭和30年の頃には全国的に特殊学級の数が増加し、担任の個人的な力量と創意工夫で展開されていた特殊学級の運営・指導を全ての教師ができる教育にすることが求められる時代となった。こうした背景のもと、昭和34年に6領域の「内容表」が作成された。2年の実践の後に改訂された第2次試案の前書きで西谷三四郎校長が以下のように記している。



『精薄児教育が全ての教師ができる教育になることは、この教育の発展に必要なことである。ところが多くの教師にとっては、精薄児教育では、「どう」教えるかという前に、何を教えるかが分からないということが多い。また、特殊学級の教師でもこの「何を」が客観的につかめていないために、教育をやっているものでこれよいかという不安を抱えているものもみられる。したがって、精薄児教育では「何を」教えるのかをはっきりと規定することがまず必要になってくる。このことは、何を教えるかという要請や理想と、精薄児は何ができるかという実態や現実との二つの面から決まってくる。こうして作られたのが、われわれの経験領域表である。この「何を」を普通教育における指導要領のように教科で与えないで経験領域で提示したことには積極的な意味がある。われわれは精薄児には知識と経験との間に大きなギャップがあることから、経験学習を中心において日常生活行動の形式と系統を身につけさせようとするのである。したがってここでは同じように系統性といいつながりながらも、「教科」における知識の系統性ではなく、経験の系統性が与えられる。この教育全体の系統性は単元の形での指導によって経験の横の組織づくりがなされることにより、さらに、生活的・行動的なものとなる。(中略)

この領域表は二つの意味で我々は用いている。その一つは、単元学習によって教えられるべき内容が十分に押さえられ洩れるところはないかどうか、領域表をもととして常に反省がなされている。その二は、教育によって児童が果たして十分に進歩が見られたかどうかという学習評価のよりどころとして使われている。したがって前者では毎月のカリキュラムの中に領域表の各項目が書きかえられ、後者では通知表の一部に領域表があげられると共に児童生徒の発達進歩をおさえる規準として用いている。』

「経験領域表」(後に経験内容表と改称)は「モデルの指導計画集」(幼小編・中高編)と合わせて本校の教育課程のバックボーンとなり、全国の先生方のよき参考書となった。

退職のご挨拶



28歳で都立盲学校の社会科教員になった私は、当初から自分の教員生活は他の方よりも短い、と自覚していました。元々、電車や電気機関車、新幹線の機器設計を仕事としていた自分が教員になったのですから、できれば指導の核になる実践に関わる研究、例えば教育課程や教材、指導法の研究をしたいと考えていました。しかし、校長からは赴任初日に寄宿舎の舎監長兼任を申し渡され、中途失明の先輩教員からは「一緒に視覚障害児のための視覚教育の研究をしてくれないか」と誘われて、私の視覚障害教育が始まりました。

教員生活35年の内、16年を5校の管理職として、また、35年の内、6年を知的障害教育で、29年を視覚障害教育で過ごしました。後半の10年は盲学校の管理職として、殊に最後の3年を筑波大学附属学校教育局と附属視覚特別支援学校にお世話になったことは私にとっては僥倖と言えるものでした。それまでも附属視覚特別支援学校は、盲学校や視覚障害教育の中で独自の貢献をしてきた学校である、との認識はありました。しかし、赴任して実際に学校の責任を取ってみると、それまで認識していた「独自性」が、一層の重層性と重要性をもって迫って参りました。しかも、そのわりには先生方は、日本や世界の視覚障害教育における附属視覚特別支援学校の重要性や危機感の認識が希薄だったり、観念的ではないかなあ、という感想をも

附属視覚特別支援学校校長 皆川春雄



って始まりました。赴任当初に抱いたこの「独自性」や「重要さ」の認識は、多くの研究者や指導教員の先生方、附属学校の先生方、事務局に2年にわたってご指導とご協力をいただいていた最終報告を行った「附属特別支援学校構想検討委員会」の審議経過の中で、ますます深められていったように思います。

筑波大学の多くの方々に教えられ、支えられて、附属11校それぞれが有する資源や実践、研究、発信は、筑波大学の教育研究とともにある時、これまで以上に、日本や世界の教育に独自の貢献をする重要なミッションを持っていることを、ますます確信するようになりました。「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地(井上ひさし氏)指導しながら、附属学校は今後もぜひ、「みんなが資源、みんなで支援(石隈教授)」をモットーとして、自信と元気に、いささかの謙虚さを加味して邁進していただきたいと切に願います。歴史の一時を共に担わせていただき、誠にありがとうございました。

私の学校の
名物先生
vol.10

附属坂戸高等学校の名物先生 — 竹内義晴先生 —

附属坂戸高等学校副校長 大平典男



本校の屋上に上がれば、南には連なる山々を従え芙蓉峰富士が、目を転ずれば関東平野の東方遥かに双耳峰筑波も望むことができる。香港のたいへん高名な易の先生が占ったところ、坂戸の地が日本の中心であるとその占いに占ったことである。その結果、この地に豪華絢爛たる道教寺院(聖天宮)が建てられ、今ではすっかり名所になっている。このような日本の中心を支える地にある本校の名物教師が竹内義晴先生である。

竹内先生は平成12年に公立高校から本校に着任した。本校は生徒も多様、教科も多様、教師も多様に対応できるマルチな人間でなければ動まらない。竹内先生は、「公民」の教科担当であったが、着任早々学校の要請によって「福祉」の免許を取得した(取らされた)のである。今では「公民」、「福祉」の授業に獅子奮迅の活躍をしている。が、これぐらいは本校ではあたりまえ、先生の本領発揮は部活動の指導である。埼玉県高校演劇界のカリスマと言われているかどうかは定かではないが、県内百数十校

の演劇集団の頂点を極め、3年連続関東大会出場という輝かしい快挙を成し遂げ、日の出の勢いである。部員三十余名の一座を率いて、地域や校内でのボランティア活動は数知れず、関東地区国立大学附属高校フォーラム、台湾修学旅行の学校訪問での公演と今やそのパワーは海外にも飛び出した。本校の教育は、普通教科、専門教科を取り混ぜた、まさに総合学科の取り組みが行われており、竹内先生はまさに総合学科高校が生み出したマルチ教師の代表であると言っても過言ではない。